

試練のとき

ふらりと訪ねてきた年上の知人の言葉に、耳を疑った。「万協製薬を続けるかどうか、棒を倒して決めたらどうですか」阪神大震災から一カ月後の一九九五年二月。社長の松浦信男は、大学時代の友人と二人で、被災した工場の後片付けに追われていた。

二十人の社員には既に解雇を告げ、工場再開のめどもつかない。だが、医薬品を作る機械は修理すれば使えると分かった。慰問に来たその知人は、大阪の製薬会社のオーナーだった。からかわれていると感じた松浦は「賭けに勝ったら、あなたの会社の空きスペースでうちの薬を作らせてほしい」と訴えた。

棒が右に倒れたら事業を続け、左なら潔く廃業する。棒の上に手を置いた松浦は、迷うことな

万協製薬 松浦信男社長 (55)



万協製薬 設立は1960年。本社は多気町仁田。国内製薬大手の軟こうなど、外用薬を扱う受託メーカー。従業員は169人(6月1日現在)。多気町で工場が稼働した1997年3月期に3700万円だった売上高は、2017年3月期には32億円に伸びた。

く右に倒した。知人が出がなくなかった。した条件は、所有する大阪の製薬会社の社長職をない。父と知人との不和を引き受け、八億円の借金の連帯保証人になること。「万協製薬を倒産させられない」と、松浦は奇妙な取引に応じる。

翌月。大阪に引越すため、神戸の旧本社に立ち寄った。既に社屋は取り壊され、残った敷石のかけらだけをリュックに突っ込んだ。ふと見上げた空は、今まで見たことのないほど青かった。

大阪の製薬会社の社長に就いた松浦だったが、製品表示に万協の名前を残すことにはこだわった。だが、「そんなあなたのノスタルジーや」と、取引先の販売会社の社長から、冷たく断られた。悔しくて、言葉

人が出した条件に翻弄されることになる。連日、車で行き先を探し回す中、多気町にふさわしい候補地があると知り、幸いにも競売で用地を取り得た。

だが、県庁を訪れた際に担当者から、製薬の権利の所在をめぐり、大阪に新たな工場を造れ利の所在をめぐり、大阪の知人から横やりが入り、医薬品製造の権利をの知人から横やりが入り、返す。松浦はまたも知っていることが知らされた。用



万協製薬の旧本社の敷石。松浦社長が神戸を去る際にリュックに詰めて持ち帰った=多気町仁田の万協製薬で

多気で復活 受託に活路

地を取得できても、紛争で行政の許可が下りなければ、努力は水の泡になる。目の前で号泣する松浦を見て、担当者は「こんな場所で泣く人はいない。君を信じるよ」と、工場稼働の道筋をつけてくれた。

九七年一月末。再スタートを切った万協製薬の出荷場で、医薬品のクリームを詰めた段ボールがうずたかく積まれた。新たに集まった五人の社員を前に、松浦は胸を熱くして言った。「この日のことを忘れない。俺たちの技術を世界に売ろう」

同社は製薬大手など、相手先のブランドで薬を作る受託製造に活路を見いだす。以前の取引先の少なさが危機に拍車を掛けたことを、阪神大震災で痛感したからだ。「相手に必要とされる会社になる」。自社ブランドにこだわって営業に人手を割くより、高品質の薬を作る技術力で勝負しようと考えた。松浦の読み通り、二〇一七年三月期の売り上げは二十年前の百倍に増えた。

青と白を基調にした万協のカラー。それは、松浦が神戸を離れる時に見た青空の色だ。廃虚に立ち、絶望を希望に塗り替えた。(池内琢)